

## 伝説時代の清地村を考える

深井滋男

はじめに

いったい地球が出来たのは、いつ頃なのだろう。

多くの学者は約50億年前という。気のおおくなるような数字である。

地球上に人間らしい最初のものが現われたのは、直立猿人（南アフリカ発掘）の出現が約100万年前、それよりずっと人間に近くなった最古の人類化石、ジャワ原人（ジャワ島発掘）が現われたのは、約50万年前とのことである。

（起源のナゾ 光文書院）

地球の起源を考えていたら、こんな答が返ってきた。

では、清地村に人間生活が始まったのはいつ頃なのであろう。そこで空白時代の清地村を次のように考えてみた。

地名のいわれ

古代の清地村は、海中に沈んでいた。

その頃は、百間、久喜辺りから栃木県藤岡辺りまで、海が入りこんでいたといわれている。幸手、栗橋もまだ海中に在った。

その頃縄文文化を育んだ縄文人の生活の場が、貝塚として遺っている。

杉戸町では泉地区（約7000年前）・一桁と離れない所に宮代町の山崎、西光院、前原遺跡（約3500年前～14000年前）等がある。

（杉戸町、宮代町歴史散歩）

その海が水退して洲が広がり次第に陸地化したのは、延喜（901～23）以来永和（1375～79）の頃の500年間であろうと、新編武蔵風土記稿は記している。約1000年程さかのぼる。

陸地化を続けて、最も低い所が古利根川の流路として残った。沼や沢がいたる所に散在していたであろう。

古利根川は、利根川の本流で流路は日光街道を自然堤防として、向う岸は百間の台地を堤としたといわれている。

川巾は一軒から二軒にも及ぶ。

この流路は、幾筋もの細流をかかえていて、時により流れを変えては、激しい水音をのこして流れていたようだ。

大雨が降り川一面に水量が満ちると、轟音は遠く四方に響いたといわれている。

この水音の「ドゥ、ドゥウ、ドゥ、ドゥウ」から百間の地名が起ったと、古老は伝える。

ドドマ（百々間）、モモマ（百々間）、モンマ（百間）。

清地の地名は「シヨーズ」「シヨージ」の転語であろうと、地名辞典はいう。細流の意味

をもつ。

杉戸は古くは杉門と書き、渡船場から起った地名といわれる。それならば『過渡』『過門』と書くべきかと地名辞典は解く。

スギトの語を分解しながら、語源を探ぐると、スギはスキの乾語で砂礫地（シヤレキ）地といい、砂や小石の混った土である。

トは沼、湖（アイヌ語）とあり、ツは舟着場、港という意味をもつ。

清地、杉戸、百間いずれも水に関係があり、当時の地形を物語っている。

村の小字について考えてみよう。

内田（うちだ）

うち（内） 入りこんだ地形・縁（ふち）のなまり。

ない（内） 土地。内側（うちがわ）の。アイヌ語で川、谷、沢。

た（田） 語源はわからないが、稲を植える耕地。

前（まえ）

ま 舟着場。アイヌ語で河または海につづく湖、沼、袋状湿地。

え 入江の江。漢字では、かわの意。

まい ないの転語で川沿の地。水面、水浜。

い 水路。

瀬戸（せと）

せと 狭い通路。海峡。谷間。

三本木（さんぼんぎ）内。

さば 砂礫土

さばき（捌）新田の一種。

注、さばきの転訛か、目印になるような木が三本あったのであろうか。

堀添（ほりぞえ）

ほり ほり（墾）。開墾地。

ぞえ 沿っている。

笹内（ざるうち）東、西、南

ざる ざれの転語で小石の多い所。崖崩れした所。葭田（ざるた）。  
ばらは方言で「ざる（笹）」。荒地。

うち（内） 内田に同じ。

丑癸（うしおき）

うし 場所。のとの転語で狭い通路。

うすき 笹に同じ。

おき 湿田。

注、癸丑と語を変えると、みずのとうしとなる。この年の開発か。

癸丑年・慶長13年（1613）、延宝元年（1673）、享保18年（1733）。

深田（ふかだ）

ふけ 深田。低湿地。

ふか 語原はわからない。

豊後（ぶんご）東、南、裏

ぶん 分。新田の別名。

ご 不明。

注 「ご」は郷のなまりか。

大頭（だいとう）

たい 平地。原野。

だい 大きい。台。

とう 峠。尾根。

井戸田（イトダ）

い 水路。 だ 田

と アイヌ語で沼、狭い所（せと）

中妻（なかずま）

な 土地。なか（中）

つま つま（瀧）沼、沼沢地。はし（端）、へり（縁）。

注 中妻という地名は記録にはない。俗称であろうか。役場の付近に中妻会館がある。

中期頃の記録に麴町、新町の町名が見える。準市街地を形成したころの地名らしい。

地名言語辞典 山中襄太著 校倉書房

日本地名小辞典 鏡味完二著 角川書店

語源を探ぐると、やはり水とのかかわりは切離せない。小学生の頃、理科の時間に貝の化石を見た。この化石は大正12年の震災の時、校庭が地割れして出土したと、先生はいつていた。そのとき初めてこの辺まで海が入りこんでいたことを知った。

伝説を探ぐる

清地の来迎院縁起によると、鎌倉時代の初期領主下河辺庄司行平この地に擔願寺を建立す。とある。

その頃 人の生活が営まれていたように思える。

縁起には倉松沼、神扇沼、響瀬沼の主神（ぬし）の勢力争いの話がある。

倉松、神扇、響瀬地区であろう。開発の手がのびて、沼が田に開けていくような暗示を与える。

また、この地区が沼沢地であったことを、物語っている。

村を開発した人等は、いつ、どこから来たのであろう。

その頃は、下総国に属していた。

近津神社の祭神は、香取、鹿島の神々である。下総・常陸の台地に住む人等が移り住み、開拓したのであろう。

杉戸の郷社は、上杉戸の香取神社である。また村の周囲には香取神社が多い。

近津神社の伝説の一つ。

古くは、百間村の切戸地区（動物公園駅東口付近）に鎮座していた。ある年大洪水が起り、神社は流されて清地の現在地にとどまったという。

切戸、川島地区の人等は昔から近津神社の氏子である。

青年団に入っていたころ、祭礼の寄付を集めにこの地区を回った。

神社境内にある 弁天様の由来も沼の主神にまつわる話である。

神社の起源はわからないが、草分けの人等がこの地区にお祭りしたのであろうと古老は伝えている。

宮代地区の香取神社の分布を調べたがなかった。川島、切戸地区の開発は、文禄、寛永の頃に開発されたようだ。

神社の近くに来迎院がある。村の発祥はこの地区辺りから、起ったのであろう。

明治2年ご一新により、地頭は知行を新政府に召上げられた。その記録に。

酒井安房守上知	清地村	(上・下清地)
三尾三郎上知	清地村新田	(三本木)
高田釵之助上知	清地村新田	(豊後)
能勢省兵衛上知	清地村新田	(九右エ門新田)

とある。

先代の神主さんから聞いた話では、この神社は舟運航行の安全を守る水神であるといっていた。

神社は街道に沿っている。また街道は古利根川の堤跡であるともいっていた。

神社は川を見守るように建っていた。

最近 杉戸の愛宕神社へお参りに行った。このお山には、天狗様がお祭りしてあり、十返舎一九の歌碑が建てられていた。探してみたが、歌碑は見当らなかった。記憶ちがいかと思い天狗様のあるお堂へ行くと、荒神様の縁起が書いてあった。

縁起によると、

「此のお山は荒神面と申しまして、古利根川の堤跡であります。

古は此の川の向が武州、こちらが総州で鎌倉街道を望み、岩槻、田宮、春日部の諸域を控ゆる要害の場所でありました。だからこの荒神様を国境地荒神と申します。中略

荒神様は、阪東の武士が遡って来た時風波があらく、ここに舟をつけて守本尊をお祀りしたものです。時は永和2年（1376）9月18日、今から611年前のことです」以下略。昭和57年元旦。

この縁起は この近くの海老原さんという方が書いたものです。

十返舎一九の狂歌が書いてあった。

「南無三宝 荒神と杉戸宿 見返る空に 言い銀杏」

高野の永福寺の縁起によると、高野、上杉戸地区の開発は、奈良時代までさかのぼることができる。下総国葛飾郡大島郷をこの地に、比定している。

縁起に見られる孔王部姓は 養老5年（721）の大島郷の戸籍（こじやく）にも見られる。

清宮秀堅（せいみやひでかた）著『下総国旧事考』では、和名抄の八島郷を大島村と比定し、八島は大島の誤りであろう。『青山延于云、東大寺古記モ、大島ニ作レリトゾ』という。

また『養老戸籍の河和里（甲和里 かわわのり）は兵部式（延喜式兵部省道）の河曲（かわわ）にて、杉戸駅西に上中下川崎、東西大輪等の村あり、其の名残ならん。今の杉戸宿は、河曲駅の移わなるべし』と記している。

埼玉県地名辞典（角川書店）では、大島の地名は 開発者大島氏にちなむというが、不明としている。

正保年間の武蔵田園簿では『大島新田』となっている。

東大寺は西行法師開山という、鎌倉時代初期である。永福寺の付近で、その頃はその辺りを大島といったのであろうか。

大島郷は 都内葛飾区柴又町とみる説もある。

桑原郷では、堤根、本郷辺りを比定し、幸手領46か村の内とみている。（清地も含まれる）『東鑑に建長5年の條 桑原平内あり 此の地の人などにや』とある。

和名抄（承平年間931～937年に成立）の頃の清地に人跡があったかもしれない。

中世の農村支配は 領主が直接に農民を支配する形と、土地の有力者である土豪などを通じて、間接に農民を支配する形とに分かれていた。

土豪が存在したことを証明するのに、板石塔婆がある。

『杉戸町の板石塔婆』によると、清地地区には 豊後に三基ある。

元享元年（1321）応永29年（1422）永享□年（1429～41）と記銘されている。

豊後地区は 元禄11年の名寄帳によると 新田となっている。

板石塔婆造立には、強い信仰心と大きな財力が必要となろう。

近くには堤根、下高野に板石塔婆が見られる。

上杉戸、高野地区には鎌倉街道が通っている。その頃はこの地区を中心として町並が形成されていたといわれている。

東山、東海の二道も、この街道と同じ所を通っていたと伝えられる。

兵部式の河曲駅への道であろう。

南北朝、室町、戦国時代に国人、地侍といった土着の武士が起っている。

室町時代には足利成氏が古河に在って、古河公方と称した。その家臣一色氏は幸手を居城としている。

平須賀宝聖寺文書大永5年（1525）の末寺帳46か寺の中に『来仰院・清地』と見える。地名の初見である。

来仰院縁起に、明徳年中（1390～94、北朝）寺再建の大檀那として、この地区の土豪と思われる人名が見られる。

来仰院付近に、板石塔婆は無かったのであろうか。

板石塔婆は、中世に始まって中世に終わっている。

古代 中世を通じて、人間生活の営みの証しを持たない村は、この間が伝説時代となるう。

しかし、史上には現われなかった人間生活が、ある時代清地のどこかでひっそりと営まれていたかもしれない。

おわりに

今、来仰院に見られる石塔は、角形が多い。この形は江戸時代以後の様式といわれ、現代まで続いている。古い石塔では、寛永10癸酉（1632）と記銘され、慶安（1648～51）寛文（1661～71）と続く、この石塔は代々の住職と思われる。農民のものでは元禄前後（1688）の記銘が古い。

一般農民の石塔造立は、江戸の中期頃からといわれている。

秀吉時代の兵農分離の政策から、土豪は武士と百姓に分れた。

江戸時代になって、幕府は土豪的百姓の分解と小農の自立策をとり、年貢の確保を計った。

今、町内を歩くと、所々に古い石塔や、道祖神、庚申塔、地藏等を見る。これらの石造物は ようやく自立した当時の農民のくらしの証しであろう。

地名を探ぐり、伝説、史料を探ぐると妄説、異論があつてとまどつたが、それはそれとして、そこには隠された真実があるように思える。

土豪の起りと、土豪の影に隠れた農民生活の立証を探ぐることが出来なかったが、それはなお今後の課題として研究したい。